実践報告 6

大崎市立松山中学校
対話し、主体的に学習する生徒の育成
～ユニバーサルデザインを生かした授業づくりを通して～

1　実践概要

本校は、ユニバーサルデザイン（以下、ＵＤ）の考え方を基盤とし、全ての生徒が「分かった、できた」を実感し、学びを深めることができる授業づくりを目指して、実践を行ってきた。松山地域では、学力向上とともに、多様化する児童生徒への対応が大きな課題となっている。従来の授業の在り方では、一人一人の児童生徒に対応することは非常に困難な状況である。そこで、上記の主題を掲げ小中高と連携を深めながら授業改善に取り組み、課題解決を図った。

１年目（Ｒ３年度）は学習環境のＵＤ化を行い、学習の妨げになり得る視覚情報や聴覚情報などを取り除いた。２年目（Ｒ４年度）は、授業のＵＤ化に力を入れて取り組み、視覚化・焦点化・共有化の３つの視点を基に授業改善に努めた。その際に、生徒がどのように情報を認知するのかについて研修を行った。情報の捉え方を認知特性と呼び、これは人によって異なる。生徒の認知特性の偏りを踏まえながら授業づくりをすることで、より多くの生徒が参加できる授業を目指した。３年目（Ｒ５年度）は、これまでの知見を踏まえ、生徒が対話しながら主体的に学ぶことができる授業を目指した。その際に、人的環境のＵＤ化を推進していくことで、学び合える環境づくりを進めていき、全ての生徒が学びを深める授業に近づくことができた。

◆キーワード◆　ユニバーサルデザイン（ＵＤ）、認知特性、視覚化・焦点化・共有化

2　令和３年度の取組の概要

主な取組	(1) 学校のＵＤ化に関する研修の実施 (2) 学習環境の整備 (3) 協働による授業づくり（英語科、保健体育科、理科における研究授業の実践）
成　果	(1)について 研修を通して、「共に学ぶ教育の理念」や「学習環境のＵＤ化」、「授業のＵＤ化」の３つの視点について、教職員で共通認識を持つことで、学校全体で取り組もうとする意識を高めることができた。 (2)について 教室を中心とした環境整備に取り組んだ。特に、黒板付近の掲示物を「時間割」、「今日の日程」、「学習に必要な約束」などに制限したことで、生徒が学習に集中する姿が見られるようになった。 (3)について

	授業づくりでは、焦点化・共有化・視覚化を意識した取組ができた。例えば、１時間の流れを黒板やＩＣＴ画面で視覚化したり、学習プリントの文字やイラストの工夫をしたりした。研究授業を定期的に実施したことで、互いの授業のよさを自分の授業に取り入れることができた。さらに、ペアトークを学級で取り入れることで、生徒同士の意見交換がスムーズに行えるようになった。
課題点	・共有化の視点における課題は、生徒個人の意見を全員で共有できるようにするための発表方法の工夫をすることである。 ・視覚化、焦点化の視点における課題は、生徒が家庭学習でノートを見て復習できるようにするために、教師が板書の書き方を工夫することである。

３　令和４年度の取組の概要

主な取組	(1) 授業のＵＤ化に関する研修会の実施 (2) 協働による授業づくり（社会科、英語科、道徳における研究授業の実践）
成　果	(1)について 教職員が生徒の「認知特性」を理解しようと意識し、学び方の異なる生徒の困難さに着目して授業づくりを考えるようになった。具体的には、学習に困難さを抱えている生徒に対する視覚的な資料の掲示、生徒の意見を視覚化し全体で共有するためのＩＣＴ、学習支援アプリ（Google スライドや jamboard、ロイロノート）の活用等について知見を得ることができた。 (2)について 協働による授業づくりでは生徒の実態把握（客観的な事実や情報を総合的に捉える）を行ってから授業計画をつくり、授業をどのように展開していくかを考えた。理解の早い生徒には学習課題が早く終わっても足踏みをせず、一層理解を深められるような手立て（ピュアチューターの役割等）を考えた。また、個別の支援が必要な生徒には、学習課題で迷うことがないように学習過程、個別の支援などの手立てを複数の教員で考えた。理解の早い生徒と個別の支援が必要な生徒の「認知特性」と手立てをまとめ、学習指導案や略案に記載したり、座席表を用意したりして教員で共有した。それにより、「認知特性」に偏りのある生徒の特性に応じた授業づくりの実践を蓄積し、それぞれの教科の授業に役立てることができた。その授業改善の結果、全ての生徒が学習に取り組むための同じスタートラインに立ち、本時のめあて達成に向けて意欲的に取り組むことができたことは大きな成果である。

課題点	・これらの実践を通して、生徒の「認知特性」は様々であり、多面的・多角的に生徒の学び方を探っていかなければいけないことを学んだ。今後は全ての授業において、生徒一人一人の学習スタイルや思考のプロセスを見取り、多様な学び方を踏まえた授業づくりを考えていくことが課題である。

4　令和５年度の取組（まとめ）

指導目標	研究主題 対話し、主体的に学習する生徒の育成 ～ユニバーサルデザインを生かした授業づくりを通して～ (1) 授業のＵＤ化を進めることで、全ての生徒が「分かった、できた」を実感できるようにする。 (2) 人的環境のＵＤ化を進めることで、生徒が相互に学び合いながら学習を進めることができるようにする。
指導目標に対する主な手立て	【授業づくりの視点１（授業のＵＤ化）】 ・授業のＵＤ化の３つの視点（視覚化・焦点化・共有化）から授業を見直す。 ・生徒の認知特性の偏りについて、チームで分析することで、授業における情報の提示の仕方を多角的に検討できるようにする。 【授業づくりの視点２（人的環境のＵＤ化）】 ・学級づくりを基盤とし、互いに話し合えることができる環境づくりを行う。 ・分からないときに自ら聞くことができるような関係づくりを構築するため、授業の中に自由に課題を設定する時間を設けることで聞き合いの時間を確保する。
経　過	(1) 全体研修（校内研究ガイダンス） 全職員で授業づくりの方向性を共通理解するために、年度当初に校内研究のガイダンスを実施したり、聞き合いの授業実践についての研修を行ったりした。公開授業に向けての検討会では、上記の視点を踏まえた意見交換がなされた。また、集団の特性をつかむため、i-check の結果を活用した。 (2) 第１回授業実践及び授業検討会について 第２学年社会科における「江戸幕府の政策」についての授業を行った。資料をまとめる活動が中心であるが、出てくる語句や政策の内容が多く、理解が困難な生徒が多くなることが予想された。事前検討会では、どこに着目して、何をまとめるのかを明確にすることで、全ての生徒にとって取り組みやすい活動になるのではないかと意見が出た。このことを実現するためにシンキングツールの１つであるクラゲチャートを用いて、キーワードをまとめやすいようにし

	た。また、話し合う時間を設定することで、生徒がお互いに関わり合いながら、クラゲチャートにキーワードを書き込んだり、その内容について教え合ったりできるようにした。 (2) 第２回授業実践及び授業検討会について 第２学年数学科における「多角形の外角の和の求め方」についての授業を行った。これまでの知見を生かし、全ての生徒が学びを進めることができる授業を目指した。そのために、構造的な板書の工夫（特に、必要なことが残ること、色分けが適切にされていること）、聞き合いの工夫（難易度別に選べる複数の課題の提示、ペアトークや自由に動ける場面設定）を行った。
成　果	今年度の研究を通して、以下の成果が挙げられた。 (1) 第１回授業実践 ・時代区分の長さを視覚化するために紙テープを用いたことで、生徒は江戸時代の長さを実感することができた。 ・「クラゲチャートの枠を埋めたい」と思い、真剣に取り組んでいる様子が見られた。どのように埋めていくのか、個、グループなど学習形態を自分で選択していくことが、課題解決につながっていた。 (2) 第２回授業実践 ・板書が工夫されていて、生徒の思考のモデルになっていた。色分けも効果的だった。 ・指示や発問が明確だった。また、学習段階が分かりやすく、何をするのか生徒が迷うことがなかった。 ・話合いの場面が多く確保されていた。個別で式を書いてから周囲と情報共有し、自分のつまずきに気付く生徒もいた。 ・それぞれのノートを共有したことで、お互いの記述を見ながら振り返ることができた。
課題点	今年度の研究を通して、以下の課題が挙げられた。 (1) 第１回授業実践 ・生徒がどの資料を利用しているのかお互いに分かるようにすることで、生徒同士の話合いに深まりを持たせること。 ・人的環境のＵＤ化をするために、生徒の交流について、何について話すのか、どのようなスタイルで話すのかなどの焦点化をすること。 (2) 第２回授業実践 ・伝わりやすい工夫はあったが、ねらい達成に向けた作業になってしまう部分があったこと。 ・自分から聞きに行けない生徒への配慮をどのようにするのか、更に考えていくこと。

５　大崎市立松山中学校におけるＵＤの視点を取り入れた授業づくりの工夫

(1) ＵＤの視点を全職員で共有するための過程

前述のように、３か年計画でＵＤの考え方を取り入れた。まず１年目は、教職員が共に学ぶ教育の考え方を学びながら、すぐに実践することが可能であった学習環境のＵＤ化から始めた。２年目には、「認知特性」について理解を深めながら、授業のＵＤ化を図った。授業づくりの際には、何人かの生徒の認知特性の偏りを想定しながら、どのような手立てを講じればより多くの生徒にとって分かる授業になるのかをチームで検討した。３年目には、石巻市立鹿又小学校のＩＣＴを活用した「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に進める国語の授業実践例をもとに、これまでの授業の在り方を見直した。生徒が活動する時間を確保するとともに、生徒が相互に聞き合うことのできる活動の設定を行った。また、聞き合いやすい人間関係を構築できるように、学級におけるペアトークやアサーショントレーニングを行った。このような段階を経て、ＵＤの視点を取り入れた授業づくりを進めた。

(2) 生徒の認知特性を理解するための取組

個々の生徒が、授業のどのような場面でつまずくのかを、授業の学習事項だけでなく情報の提示の仕方の面からも検討した。例えば、板書を写さない生徒がいた場合、どの授業でも同様なのか教師間で連携を取り、教科によるものなのか、生徒が抱える困り感によるものなのかどうかを判断した。さらに、書くことや目線の移動など、生徒が苦手とする部分の特性についても情報共有した。このように、複数の目で状況を判断することにより、つまずきの原因をより深く捉え、それにあった情報の提示を工夫した。

(3) 小中高の連携の工夫

各校の代表者が集まり、本事業に関する情報交換を行った。小・中学校はＵＤを取り入れた授業づくりに関して研究を行っているため、どのような実践を行っているのか共有したり、話合いの決まり事を共有したりすることができた。高等学校はＵＤＬについての研究を行っているため、授業のＵＤ化との類似点や違いについて相互に情報を提供し合うことができた。

(4) 話合い活動の工夫

本校の生徒は、話合い活動に前向きで、学び合いから多くのことを学んでいる。特に、学習アンケートにおいて「友達と話したことで新しい発見ができる。」という項目では９０％の生徒が「できる、よくできる」と回答している。しかし、生徒によっては、友達の意見を聞いて自分の考えを深めることはできても、自分の意見を整理してまとめ、話すことに抵抗を感じている様子も見られた。そこで、授業では互いの意見を自由に聞き合うことのできる時間をなるべく多く設けるとともに、何について考えるのか、何について相談すればよいのかということを焦点化することで、生徒が主体的に学びに取り組めるようにした。

６　「共に学ぶ教育推進モデル事業」について

(1) ユニバーサルデザインによる授業づくり

授業のＵＤ化の３つの視点を生かし、課題や話し合う論点を焦点化することで、どの生徒でもコミュニケーションを取りやすくなるように授業を構築することができた。このような授業づくりを工夫することで、生徒は日常生活の中でも、分からないことを聞き合う関係が構築された。その結果、これまで授業に参加することのできなかった生徒が、ペアで相談したり、自分の考えをノートやプリントに記述するようになったりしたことが授業の見取りから分かった。実際に授業実践の後に取ったアンケートでは、授業で相談することができたと回答した生徒の割合は 86.6%となった。

(2) 小学校、中学校、高等学校の連携体制構築

「共に学ぶ教育」は特別支援教育だけものではなく、学校の教育活動全体で取り入れるべき考え方であると、全教職員で理解を深めることができた。また、小学校や高等学校と適宜情報交換を行うことで、互いの取組のよさを取り入れることができた。一例として、松山高校ではＵＤＬの視点から、学習者自身が学び方を選べるようにするためのオプションを教師が提示するという実践をしていた。そのことを参考にして本校では、社会科の授業実践（江戸時代の政策について）において、調べる資料のオプションを準備し、生徒自身が興味を持った事柄について調べることができるようにした。

(3) 研修会やケース会議による生徒理解

授業のＵＤ化を図る際に、生徒の「認知特性」の偏りを理解することが重要であると分かった。生徒の「認知特性」の偏りを理解するためには、一人の教師の視点だけではなく、複数の視点から多面的に考察し、実際に行動に出ている部分だけではなく、なぜその行動が起こるのかという本質を検討することが必要である。そのためにも、ケース会議やアセスメントを支援するアプリを利用し分析することが有効であった。

＜総評＞

松山中学校では、「学習環境・授業・人的環境」それぞれの UD 化に段階的に取り組まれました。改善点を焦点化し、先生方自身が学びつつ、出来るところから実践する中で、着実に成果をあげられてきました。また、先生方が連携し、課題や生徒の実態を共有しながら、共同で授業作りに取り組んでこられた点も重要だったと思います。「認知特性」はあくまでも実態把握や支援を考える際の一つの観点にすぎませんが、先生方が共通認識を持つことで質の高い授業検討がなされ、どの生徒にとっても分かりやすい・参加しやすい授業作りにつながったものと考えます。

（宮城教育大学　准教授　寺本　淳志先生）